

● シリーズ 私の見た日本 Vol.202

市場と廃校建築からのメッセージ

Yuling Tsai (ユーリン・サイ)

台湾台北市に生まれ、台湾南部で育つ。2011年より10年間台湾の建設会社で働く。2015年よりフリーランスのデザイナーとしてランドスケープデザイン、建築デザインなど様々なプロジェクトに携わる。2011年から2022年まで台湾の大学で講師を務める。2018年から現在に至るまで、北九州市立大学大学院環境工学研究科博士後期課程Dewancker Bart研究室に在籍中。



2020年秋、私は動いていた台湾の大学を休職し、台湾から日本の北九州へと旅立った。私は日本に留学してきた「外国人」であるが、日本での生活はまるで昔からこの地に住んでいるかのような馴染み深いものとなっている。それは台湾の文化の至るところに日本の文化が点在しているからである。歴史的な話をすれば、1895年から1945年まで台湾は日本の植民地であった。1945年に植民地時代は終焉を迎えたが、ところどころ日本の文化やライフスタイルは台湾の社会のなかで生き続けているのである。

また地理的な観点からいうと、台湾と日本の間の直線飛行距離は約2,146kmであり、

チケットを購入して日本に到着するのはわずか2時間のフライト、頑張れば日帰り観光できる距離である。残念ながらCOVID-19の影響により国を跨ぐ移動は規制を受けているが、本来であれば多くの人々が台湾と日本を行き来していたと思う。そういった物理的な人の往来が規制された一方で、デジタルなコミュニケーションの方法は一般的なものとなった。そういった情報社会の変化の恩恵によって、今まさに旬の日本の文化がタイムラグなしに台湾に届けられる。これは文化だけではなく、建築技術やデザインの面でも影響を受けている。

都市に求められる市場

1年以上日本に滞在し、パンデミックによって日常生活に不便を感じることもあったが、それでも多くの経験を得ることができた。最も興味を持ったものは、地元の伝統的な市場である。その地域を知るには、伝統的な市場を訪れるのが一番であるといえる。日本では、伝統的な市場のスペースが半屋外に作られているため、市場の営業時間が天候に左右されることがない。市場に行けば行くほど、魅力的な物語に出会うことができる。

市場全体の空間の中には隠れた路地のような小さな空間が無数に存在していて、店先の商品が路地にはみ出していたり、子供の遊び場や野良猫たちのたまり場になっていたり、そういったその地で暮らす人々のプライベートが垣間見える空間に出会う小さな発見は、まるで宝探しのような、なにか特別なものを発見する喜びを感じる。市場特有の空間のレイアウトとシーケンスは、まるで迷路に迷い込んだような錯覚を与えることもある。童心にかえるような空間は市場特有のものだと思う。

また、店先の看板のグラフィックや空間の使い方、商品のレイアウトに至るまで趣向にとんだ工夫は最近の建築のデザインにはない光景である。こういった市場特有の空間は地域をより活性化させるポンプの役割を担っているし、また市場の活発な動きに比例して都市そのものも活性化される。都市の文化をより豊かにしてくれるのである。

しかし近年、商品の多様性や衛生面、様々な問題から伝統的な市場や商店街といったローカルな店から清潔で明るく、世界中の商品が手に入る大型のスーパーに代わってきている。

私が暮らす北九州市でも旦過市場という伝統的な市場が取り壊される。旦過地区はかねてより隣接する神嶽川の流下能力不足に伴う度重なる浸水被害や、木造建築物の密集や老朽化など、防災面で多くの課題を抱えてい

た。これらを解消するために河川改修工事と合わせた土地区画整理事業が行われ、新市場として4階建ての複合商業施設になる。防災や構造、環境など、改修する以上に手を加える必要があるため、取り壊される運命となったが、市場という役割が単に「商業」として成り立っているのではなく、コミュニティや空間としての「文化」という役割が存在していることを忘れないでほしいと願っている。

廃校から生まれる新たな魅力

都市において建築が社会的に求められる機能をなくしたとき、そこは都市のポイドとなる。もちろん都市全体のデザインにおいて計画されたオープンスペースはアクティブなポイドとなる。使われなくなったポイド空間は、犯罪の温床となる可能性があるし、社会の中に雑然とした景観を生み出す。また空間を利用せずに建物を維持することは、構造的にもコスト的にも建物そのものの価値を低下させることになる。

私が研究を行っている学校建築も、ここ数

年、同じような状況になってきている。多くの学校建築が、少子化の影響を受け、廃校へと追い込まれている。地方では校舎がまだ使える状態でも学校の統廃合を余儀なくされ、学校建築が取り壊されたり放置される。一方で都市部にある学校も生徒数の減少に直面しているが、立地条件の良さから、コンバージョンされ新しい施設へと生まれ変わっているケースもある。

廃校となった後の学校建築には様々な問題が取り巻いており、建築的価値の観点から廃校を保存する動きがあっても、耐震改修等の難しさや、修繕のための資金集めなどたくさん問題をクリアしていかなければならない。しかし、最近「廃校建築」というのがひとつのトレンドとなっており、数々の廃校が現代的な施設へと生まれ変わっている。かつて誰もが通っていた「学校」がいくつになっても通うことができる「みんなの学校」として社会施設や商業施設とうまく融合させた新たな公共空間の一員となったのである。

廃校建築のコンバージョンでは異なった用途の空間を新たに創り出すだけでなく、建築自体のライフサイクルを延長させ、さらにプロジェクト全体のプロセスにおいてゆっくりと周辺に影響を与え、地域のアイデンティティを新たに生み出している。

建築の文化的な価値

昔も今も、学校や伝統的な市場は、インタラクティブな情報交換の場となり、そこで暮らす人々の生活を豊かに、そして街の個性としてその存在を示している。建築の再設計プロセス、いわば改修やコンバージョンにおいて、最善の解決策は未だ見つかっていない。しかし、日本が各地で取り組んでいる実験的な廃校再生のプロジェクトは今後も増えていくだろうし、これまでになかったような斬新なアイデアが飛び出してくることに期待している。都市開発において経済的な価値が強調される一方で、文化的な建築の価値も見落としてはならないと思う。

(翻訳：北九州市立大学大学院環境工学研究科博士後期課程 森友里歌)



左上／市場の入口 右上／市場の日常 下／市場の交差路



市場の裏的空間



市場の店の並び